【The Black Note】第16話　宿命の前哨戦

■オープニング

セレスモノローグ「ブラックノート、黒い背表紙……漆黒の装丁の闇の歴史書。12の精霊核の伝説を時の果てまで追いかけた黒髪の歴史家がひっそりとまとめ上げたものだという。どこにあるのか永遠の謎とされてきた真相がついに解き明かされ、闇に消された真実の歴史があたしたちの目の前に姿を現そうとしていた」

■タイトルコール
デュレ「The Black Note 第16話　宿命の前哨戦」

■本編
□アルケミスタの教会を離れて、空の人。

デュレ「どこへ行くつもりですか？　マリスさん」
マリス「なぁに、始まりの場所に行くだけだ。心配するな」
デュレ「始まりの場所……？」
マリス「……ここだ」

SE：空から地面に下りる。そして、歩く。

デュレ「シメオン大聖堂……」
マリス「そう。ここがわたしのこの世界での始まりの場所だ」

SE：大聖堂に入る。

マリス「――千三百年か。街はだいぶ変わったというのに、ここは変わらないんだな――」

SE：ドアを開けたり、歩いたり。色々。
SE：最後に召喚の間に入って、誰かがいる不穏な空気。

マリス「……。そこにいるのは誰だっ！」
サム「よぉ、マリス……、意外と早い到着だな」
マリス「……サムか……。何故、お前がここにいる？」
サム「なぁに、簡単な推理だよ。と言いてぇところだが、山勘ってとこかな？　わざわざ、勝利の好機を棒に振ったんだ。何かあるに決まってる。――俺たちを屠ることにさして興味もなさそうだしよ。としたら、てめぇが本当に望むことは何なのかと考えたのさ」
マリス「それで、わたしは望みは何なのだ？」
サム「さあね……。ま、決着をつけようぜ」

SE：サム、歩いて、マリスの横で立ち止まる

サム「……来いよ、地下墓地大回廊へ」
マリス「何故、そこへ行かねばならない？」
サム「――てめぇの欲するものがそこにあるからだ」

マリス「わたしは何を欲している？」
サム「――てめぇが探しに来たのは“万里眼”だろ？　何故かは知らねぇが、それはシェラの手にあって、さらに何故か、迷夢の手にあった。――あれも不死鳥の卵よろしく、てめぇが持ってきたなまものなのか？」
マリス「怖くなるほど、色々知っているな」
サム「職業柄ね。この手の情報は割と簡単に手に入る」
マリス「それで、何故、わたしがそれを欲してると思った？」
サム「正直なところ、判んねぇよ。ただ、この部屋に長い間、万里眼が放置されていたことを偶然知っただけ。そして、それは最後の召喚、つまり、てめぇが召喚された後から、ここにあったそうだ。その二点から、テキトーに類推しただけだ」
マリス「それでよく、待ち伏せなんかする気になったもんだ」
サム「来なくてもさほど困らねぇよ。だが、こうしててめぇが現れたってことはそれが欲しいってこと。ついて来いよ。あれは……迷夢が持っている」
マリス「なるほど、万里眼を手に入れるためには行かざるを得ないワケか」

SE：大聖堂の内側から回って、地下墓地の大回廊へ……。

シリア「やはり、来たな、マリス」
マリス「ふん、あれがここになかったのなら、わざわざ、出向いたりはしなかったさ」
シリア「そうだろうな。そして、……サム、お前は手を出すな」
サム「そう言うと思ったよ。――命を粗末にするなとか、もっと冷静に考えろとかよ。利いた風な口をきくなってんだ……。だから……」
シリア「久須那との約束は……？」
サム「う、あ？　てめぇ、聞いていたのか？」
シリア「あれだけ、大きな声を出していたんだ。嫌でも、聞こえる。――で、答えは……」
サム「……わかったよ……。じゃあな」

SE：サム、歩いていく。
SE：紙を渡す、かさかさ。

デュレ「サム。これを持って行ってください……」（小声
サム「あ？　ああ……」
デュレ「リボンちゃん……。本当は自分の目的を果たすためにわたしたちを利用していたんですね」
シリア「はぁ……？」
迷夢「お～かなり本気のようじゃない？　と言うことはつまり、あれ知っちゃったのかしらね？」
シリア「あれ？　あれって何だ？」
迷夢「キミとあたしが実は夫婦だったってこと」
シリア「はぁ？　寝ぼけたことを言うな。真面目に答えろ」
迷夢「あたしは至って真面目なんだけどな。ところで、マリス。ホントのところ、デュレに何を見せたの？　教えたの？」
マリス「聞いてどうする？　貴様は――知っているはずだ」
迷夢「知らないなぁ」
マリス「ならば、永遠に知らないままでいろ」
迷夢「あらら。あたしとマリスの仲じゃない、細かいことは言いっこなしよ。……あたしたちのために少しくらい喋ってくれてもいいかなって」

マリス「何故だ？」
迷夢「うん？　何故って、それはあたしだからに決まってるじゃない。それにもう、いいや、面倒くさいし、どうせ、……不死鳥の卵のことよねぇえ？　そう呼ばれているのに何が生まれるか誰も知らないのよ。キミでさえ」
マリス「――何かが生まれるのかは判っているさ。……貴様もその昔、それを見たくて随分、ジタバタしたじゃないか。覚えていないか？」
迷夢「覚えてる。でも、それはキミがキミである限り、破滅しか生まれないっ！　希望や、新しい世界、不死鳥なんて生まれてくるはずがない。それは育んだ持ち主の心を反映して何にでもなりうるのがそれなんだから」
マリス「そうかな……？」
迷夢「え……？　ち、違うの？」
マリス「さあ？　今に判る。……貴様らが生きて“墓場”から出られたらの話だが」
迷夢「マリスちゃんも、ようやく本気になったんだ？」
マリス「ほざけ。……デュレはシリアの相手をしていろ。迷夢はわたしが片付ける！」
デュレ「はい……」
迷夢「さぁて、あたしもようやく本気が出せるってもんよっ」

SE：迷夢とマリス、虚空から剣を……。

マリス「……貴様から、来い」
迷夢「望むところよっ！（深呼吸して）……フラッシュ・アクションっ！」
マリス「うあ！　眩しい。迷夢め……。小手先の技ばかりを使って、それでも貴様は戦士なのかっ！」
迷夢「……あたしは……戦士じゃないよ。策士なんだから……」
マリス「そこかっ！」
迷夢「は・ず・れっ♪」
マリス「ちっ！」

SE：ひょおおお（空気の流れる音
SE：ギィィィイイイン。

迷夢「やるじゃん。この状況であたしの剣を防げたのはキミが初めてだよ」
マリス「……やはり、さっきは加減していたんだな？」
迷夢「ちょっぴり。あたしの可愛いエルフちゃんたちに矛先が向かないように。マリスがじぃっとあたしだけを注目するようにって♪」
マリス「ふん……。よく言うな、その口は。だが、それが貴様の怖いところだ」
迷夢「じゃ、ホントのこと言ってあげる。言わなくても判ってると思うけど」
マリス「冷静に考えると判ることだったな。もうすぐ倒せる。と思わせて、エルフどもから気を逸らせているつもりだったのだろう？」
迷夢「その通り。でも、今度はそんな必要はなし。だから、当然、手加減もなし、全力あるのみ」
マリス「だが、この狭苦しい場所を決戦場に選ぶとは考えものだな」
迷夢「ずぶ濡れになりながらの戦いなんて締まらないでしょ。だから、屋根付きにしてあげたの」
マリス「そうか？　わざわざ済まないな。お礼と言っては何だが、貴様を血の海に沈めてやろうっ！　スパークショット！」

SE：スパークショット。と、シールド。

迷夢「シールドアップ！」
マリス「シールドブレイク」

SE：シールドブレイクと同時に剣と剣がせめぎ合う音。

迷夢「きゃううぅ」
マリス「……止めたか……。サーベルごと真っ二つに出来ると思ったのだが……？」
迷夢「簡単に二つになんかなってあげないよ？」

デュレ「――光を滅せよ、闇の剣！」

SE：闇の剣、出現。そして……。

デュレ「やぁあああぁっ！」

SE：デュレ、何度もシリアに斬りかかる。
SE：最後に、シリアがデュレを背後か押し倒す。

シリア「――こうなるなら、剣術を完璧にマスターしておけばよかったな、デュレ」

シリア「――一緒にいて、何か判ったか……？」
デュレ「……えぇ。万里眼はレルシア枢機卿のものだったそうですね。でも、ハーフエンジェルは剣や弓を持って生まれてくることはないと言います。……天使とは違い、強力な魔力を物質化できないからだと聞きました……。つまり、万里眼は玲於那さんの持ち物の可能性が高くなります」
シリア「……マリスとはそんな話をしていたのか。ならば、――お前は真実を手にしている。今更、オレから説明することもないだろ？」
デュレ「それは……詭弁です。ホントに玲於那さんのものなら、わたしには教えてくれても……。そして、万里眼と不死鳥の卵が同時に同じ場所に存在し、それが共鳴、融合したらどうなるのかを……」
シリア「迷夢も言ったろ、それは誰も知らないのさ。フェンリルハウル！」

SE：超音波！

迷夢「リボンちゃん？」
デュレ「や……、やめてください。リボンちゃん。耳が……」

SE：びりびり。天井の一部が崩落。
SE：マリス下敷き。

マリス「うあぁああ」
迷夢「……マ～リ～スちゃん？」
マリス「……」
迷夢「……すぐに掘り起こして出てきそうだけど……？」
シリア「なに、数分でも時間が稼げればそれで十分だ。……落ち着かないからな……」

迷夢「そぉお？」
シリア「――行けよ、デュレ。お前が元の時間に戻らなければこの戦いは終わらないんだ。お前が名付けた闇の精霊を覚えているだろ？　そいつと契約しろ。そして……いいか」
デュレ「……」
シリア「……マリスを潰すまで、オレは帰らない……」
デュレ「どうしてっ！　帰りましょう。すぐにここを出て、マリスなんてこのまま生き埋めてしまえば」
シリア「いいや、それじゃダメなのさ。オレがまだ、ピンピンしてるうちはな。とりあえず、時計塔に向かうんだ。さっきの時計のところに行けば、帰り道が開く」
デュレ「でも、まだ、セレスにメッセージを送っていない……」
シリア「――心配する必要はない」
デュレ「どういう、ことですか？」
シリア「……オレたちは時の流れの中に既に織り込まれていると言うことさ……。メッセージを送るタイミングは必ずやってくる。だから、大丈夫だよ」
デュレ「でも……」
シリア「どうした？　デュレ」
デュレ「いえ、別に……。な、何でもありません」
シリア「そうか……。いいよな、迷夢。デュレの出番はここまでだ」
迷夢「キミがいいってんなら、あたしは止めないよ。そもそも、あたしはデュレをここに居させたこと自体、キミの判断ミスだと思ってるんだから。だってそうでしょう？」
シリア「……うるさいよ。お前。いつまでも、人をコケにした態度をとっていると後悔するぞ」
迷夢「あら、後悔なんてしないのよ。だって、ね、自分でこの方向に突っ込んだんだから、それなりに覚悟してきたつもりよ。だから、デュレ。行きなさいよ」
デュレ「どうして、そんなに頑ななんですかっ！　わたしも仲間に入れてください。わたしもここで最後まで戦わせてください！」
迷夢「あん？　もう、仲間になってるじゃない……。ねぇ、リボンちゃん」
シリア「そうだよ。お前の役目は時を越えたメッセンジャー。……お前のステージはここじゃない。――オレたちの物語に終演をもたらすには、デュレはこれ以上、ここに居てはならないんだ。……だから、行けっ！」
デュレ「……はい……」
デュレ（――さよなら、リボンちゃん……）

SE：デュレ、走り去る。

シリア「……とうとう、二人きりだな……迷夢」
迷夢「そうね……。けど、少数精鋭部隊になったって言ってくれないかしら？　その方が気分が盛り上がらない？」
シリア「――盛り上がりようがないだろう……」
迷夢「そっかなぁ？　あたしはいいと思うけどぉ……。……真面目だよね、リボンちゃん」
シリア「不真面目な方がいいと思う時もあるよ。……騎士道精神という気はないが、この戦いはフェアでないと禍根を残す。何故なら――」

SE：ガラガラ。

マリス「……後悔……するがいい……」
シリア「――後悔してるのはマリスじゃないのか？」

マリス「ふん。真っ向から否定したいところだが、否定しきれないな。まぁ、そんなことはどうでもいいさ。これから貴様らを地獄に落とせたなら、後悔くらい軽く消し飛ばせる」
シリア「……いいや。その思いは払拭できない」
マリス「――やはり、貴様だけは許せないな」
迷夢「あたしが居ることも忘れないでよ？」

SE：きぃぃいいん。

マリス「二対一か……」
迷夢「ハンデは必要じゃない？　どの道、マリスは途方もなく強いんだから、構わないしょ？」
マリス「ハンデが欲しいなら、何故、サムやデュレを帰した？　全員集めても貴様らの分が悪い」
迷夢「頭数だけいりゃいいってもんじゃないのよ。……スパークショット！」

SE：スパークショット。

マリス「シールドアップ」

SE：迷夢、マリスとの間合いを詰める。

マリス「――そんなに甘くないぞ……」

SE：ギイィィン。

迷夢（――何か、ないかな？）
マリス「フィジカルディフェンス！」

SE：さらに剣が交錯。

迷夢（届けっ！　届けば直接、魔法を撃ち込める）
マリス「くっ！」
迷夢「ははっ……。ダメっぽいね？　やっぱ、あたしじゃマリスには敵わないのかなぁ。けど、諦めないっ！」

SE：突き！

迷夢「ちぇ……。少しくらい手加減してよねぇ」
マリス「口の減らない奴だな。迷夢も。真剣勝負に不真面目だ」
迷夢「そおかしら？　口数の多いあたしは絶好調なのよ。この間は怯えちゃったから口数は少なかったでしょぉお？　そしたら、全然ダメなのよ。あたし」
マリス「目障りだ……。貴様は」
迷夢「あははっ。それがあたしよ」
マリス「――それが迷夢だったな」

SE：時々、剣が交錯する音。

迷夢「ねぇ、マリス。キミは万里眼と不死鳥の卵で何をしたかったの？」

マリス「答える義理はない。だが、冥土のみやげに教えてやってもいいが……？」
迷夢「……」
マリス「……来い……。来ないのなら……。そうか……」

　　SE：マリスの剣が迷夢をとらえる。

迷夢「あぐぅ！　う、そ、でしょう？」

　　SE：迷夢倒れる。

迷夢「だって、あたしは仮にも迷夢よ。そのあたしが、こんな負け方をするはずがないっ！」
マリス「大人しく、そこで死んでろ」

　　SE：足音。

マリス「残るはお前だけだ。覚悟しろ！」
シリア「覚悟なんか、とっくに出来てる。覚悟するのはお前だ、マリス」
マリス「ほざけ。たかが精霊風情に何が出来る。わたしは天使だ！」
シリア「精霊王、氷雪のシリアの名に於いて命ずる。出でよ、氷の刃っ！」

　　SE：氷の刃、出現。

マリス「……あの、ただ泣き喚くだけだったおチビちゃんがこうなるとはね」
迷夢「は……、早く決着つけてよね……。尻切れトンボじゃ死んでも死にきれない……よ」
マリス「貴様もしぶといな……」

　　SE：リボンちゃんの攻撃。シリアとマリス、せめぎ合う。

マリス「何故、魔法を使わない？」
マリス（……ただの獣をどうして、恐れる必要がある……）

　　SE：再び、ぶつかり。マリスの剣が折れる。

マリス「くっ……。わたしの剣を折ったのは貴様が初めてだ。褒めてやろう」
シリア「それは光栄だな」
シリア（……。あと、もう少し、もう少しで有効範囲だ……）

　　SE：けれど、マリスの剣はすぐ復活。
　　SE：マリス、シリアに近づく。

マリス「フフ……。確かお前は三度目だと言ったな……」
シリア「……聞いたって、教えてやらん」
マリス「ふん。聞く気はない。貴様が何度目だろうと、今、わたしが勝てばいいだけのことだ」
シリア「それは……どうかな」

　　SE：何か意図のようなものがピンと張る音。

マリス「……？　これは何だ……？」
シリア「さぁ！　その意にそぐわぬまま葬られし聖職者たちよ。今こそ、積年の恨みを晴らす時。
　　墓標に封じられた魔力の全てを解放し、災厄を呼ぶ黒き翼の天使を呪縛しろ！」
迷夢「あのぉ、あたしも黒い翼なんだけど……？」
シリア「お前は大丈夫だ。これはマリスの魔力にしか感応しない。久須那とサムにそういう風に
　　準備してもらったからな。……マリス！　ここがお前の仮初めの墓場だ。時が巡るまで、
　　二百二十四年間、大人しく自分の世界の夢でも見ながら眠っていろ」

　　SE：ぴいん、ぴいんと。なんか、そんな音。

マリス「なっ！　身体が……っ！　動かない」
シリア「それが……。お前が侮っていた人間の力だよ。大人しく封じられろ」
マリス「そう易々と倒されてたまるかぁ！　貴様如きにわたしは負けないっ」
シリア「……諦めろ。お前の負けはもはや、確定だ……揺るがない……」
マリス「だとしても、諦められるはずがないっ！」
シリア「――氷雪の王者、シリアの名において命ずる。星霜の彼方より続きし精霊王の死せる魂
　　を呼び覚まし、血族に受け継がれる白き魔力を解き放て。さすれば、氷の風格を閉ざされ
　　し記憶の淵から呼び覚ません！　封魔結界っ！」
マリス「くあっ！　歴史は変わるっ！　次こそは貴様を屠ってやる」

　　SE：封魔結界。

シリア「――お前にオレは殺せない……。絶対に」
マリス「くそぉっ！　何故、貴様らが選ばれ、わたしは選ばれないっ……！」
シリア「――十分選ばれてるさ。――お前は生きてる」
マリス「生きてる？　生きてるだけでは選ばれたことにはならない。貴様らを……道連れだ！」
シリア「……！　まだ、そんなことが出来るのか」
マリス「幾らでも……。身体が動かなくとも頭脳さえ明晰ならば、魔法は使える。完全に封じた
　　いのなら、魔力を完全に奪え。そうでないならば、殺せ……」
シリア「迷夢ぅ～！」
迷夢「はん？　逃げれって言っても無理よ、無理。あたしはもとより、ボロボロ。あはは……。
　　あ～あ～、そうかぁ。こうなっちゃうんだ」
シリア「どうして、そんなに落ち着いていられる？」
迷夢「さぁ？　けど、そう言うリボンちゃんだって……、落ち着いたもんじゃない」
マリス「ああ、あああぁ！　光弾！」

　　SE：光弾
　　SE：色々と崩れる音。

シリア「うぁぁあああぁ」
迷夢「うああ」

　　SE：水滴が数滴。

シリア「……命拾いか……」

迷夢「――命拾いしたって言うのかしらねぇ……。ただの気休め、延命処置……みたいな感じ。どうせなら、思い切ってやってくれちゃった方が良かったのに……」
シリア「――はは、死にそうなくせに……口が減らないな」
迷夢「いいのよ。――意地でも最後まで喋るんだから……」
シリア「何だ、そりゃ？」
迷夢「それがあたしよ。喋るの。それがあたしのステータス」
シリア「そう、だったな。迷夢……、――あれは終わったのか？」
迷夢「あれって何？　……ああ、光に住まう闇の言霊ちゃんのこと？　何だかよく判らないんだけど……一応、終わったみたいよ。シメオンの魔力はほとんど空になったみたいだし、闇の精霊ちゃんは……満足したような……そんな空気だけがそこはかとなく……ね……」
シリア「じゃあ、少なくとも天使の住む世界が雪崩れ込んできて無茶苦茶になることはもうないんだな？」
迷夢「マリスがおかしな邪魔をしていなければ、千年でも二千年でも……永遠でも……多分……」
シリア「はは……。多分か、随分と心強い発言だな」
迷夢「しょうがないじゃない。もぉ、確認のしようがないんだから……」

SE：ごそごそ。そして、シリアくんをきゅ。

迷夢「あ……。……ねぇ、リボンちゃん、まだ、――生きてる？」
シリア「残念だが、――辛うじて生きてる……。へへ……、どうした、迷夢……？」
迷夢「はぁ、ん……。あ、――お願い……外へ連れ出して……。……イヤ、こんな闇の中で逝くなんて。せめて、朝日が昇るまで……」
シリア「もう、昇ってる……。朝日を見ないまま、この街はお終いだ」
迷夢「デリカシーが足りないな、リボンちゃん。こういう時はもう少しで昇るからとか言って、励ますものなのよ。……可愛くないぞ……」
シリア「可愛くないって言われてもな……」
迷夢「ねぇ、リボンちゃん。黙らないで。話し相手になってよ……。淋しいよ。一人にしないで。……せめて、逝くまでいいから、離れないで」
シリア「大丈夫。お前は死なない、それは絶対に絶対だ。オレは――見てきたんだぜ？　向こうで。――お前はピンピンしてたさ。ちょっぴり小さくなってたけどな……」
迷夢「そうなんだ。あたしは生きてる？　あははぁ、案外、しつこいんだね、あたしって」
シリア「もう、いい。喋るな」
迷夢「喋らせてよ……、それしか、ないんだもの。わたしの取り柄。あ～あ～。失敗しちゃったなぁ。もっと、スマートに出来るはずだったのに。――マリスになんかに負けないはずだったのに」
シリア「あ……。万里眼と不死鳥の卵はどこに行ったんだ？」
迷夢「判らない。けれど、この瓦礫の下よ。あたしたちと一緒」
シリア「いいや、あれは迷夢の腕の中にあった……。不死鳥の卵だけが……」
ロミィ「……」（不死鳥の卵を見つめて……

SE：光り輝くような音。

シリア「玲於那の万里眼とマリスの不死鳥の卵が一つに……」
迷夢「こ、こんなのは初めて見たよ。……あれから、何が生まれるんだろうね……。……ねぇ、もっとこっちに来て……。寒い……の」

SE：シリア、がんばって、迷夢のところに移動。

迷夢「あったかいね、リボンちゃん。キミの毛並み……ふさふさ？　……だよ」
シリア「迷夢……、迷夢？　――いっちまったか……。――済まないが、迷夢。オレにはもう一つ、やることがあるんだ。これで最後。これがきちんと完遂できたら、オレは――オレたちは“十二の精霊核”伝説から解放される」

SE：とたとた。

シリア「フフ……ハハハ……。何だったんだろうなぁ。結局、マリスに掻き回され続けて、オレは何だったんだろう……」
シリア「……しかし、寒いな……。晴天か、星空を見たかったなぁ」
シリア「へへ……。こんなはずじゃなかったのになぁ――。どこで狂ったんだろうなぁ」

・立ち止まる。

シリア「結局、あいつに言伝たのは正しかったってワケか……。オレが行けそうにもないってことは……あいつは会えるんだ……。――あいつも死に損ないなのになぁ……様ねぇなぁ……。ははぁ……。ほとんど覚えちゃいなかったのに……。デュレの顔、見たような覚えがあったのはホントだったんだ。――オレは……ここでお終いか――。寒いよ……、ゼフィ……。……」

□どこか屋根の上で、クロニアス姉弟の会話。

ラール「……賽は投げられたって言うんだろ？　この場合」
ルーン「神はサイコロを振らない。そういう風に言うの、やめてもらえないかしら。あんたの言葉を聞いてたら胃の辺りがキリキリしてくるのよ。こうタイトな時間流に身を置く時は嫌味もほどほどにね」
ラール「それはそうとさ、ルーンに胃袋なんてくっついてるのかい？」

□シメオンで、デュレ。
SE：デュレ走っている。
デュレ（時計塔が背景になる場所……）
デュレ（――セレスとリボンちゃんの話を統合すると……、大聖堂は視界に入らない……）
デュレ（時計塔の文字盤は裏から照らされていた……。でも……）

SE：際だった静けさを表現。（ついでにデュレ立ち止まる
SE：何ものかの足音。

シリア「――随分、遅かったな、デュレ。待ちくたびれた……」
デュレ「リボンちゃん……！　どうして、ここに！」
シリア「少し考えたら、判らないか？」
デュレ「……ジーゼのところ、エルフの森にいるリボンちゃん？　でも、そのリボンちゃんなら、わたしのことは知らないはずです。あなたとわたしが初めて会ったのはもっと未来の話で……」
シリア「判ってるさそんなこと。けれど、あいつはこう言わなかったか？　二百二十四年、お前

たちが来るのを待っていたと。最初から、知っているような素振りをしていなかったか？」
デュレ「わたしたちはここで会っている？」

SE：シリア、しっぽを振る。

シリア「さあ、急げよ。壊れたら、お終いだ。だが、必ずお前だけは元の時代に帰してやるから、安心しろ。こんなところで、朽ち果ててもらっちゃあ困るのさ」
デュレ「リボンちゃん。……一緒に帰ります。一緒に」
シリア「今度ばかりはそれも叶わぬ夢だと思うぜ？　帰ってもいいのはオレじゃないんだから」
デュレ「……そんなことを言わないでください。わたしはあなたと話したいことがたくさんあるんです。――それなのに、帰ったらあと十日しかない……」
シリア「十日もあるさ。それにオレにはまだ、デュレとの二年が残っている……」
デュレ「考えようによっては……。だけど、多くのことを語るには足りないです。――それにわたしは知らない。きっと、あなたは話してくれない……」
シリア「――かもな。……ただ、今、この時を乗り越える方が全てに優先する」
デュレ「ええ……」
シリア「壊れる前に何としても帰れっ！　それがデュレの使命なのだから」
デュレ「それが使命なら、リボンちゃんを連れ帰るのはわたしの義務です」

SE：デュレがシリアを抱き上げようとがんばる音。

シリア「バッシュの馬力を侮るなよ。……デュレじゃ、無理だよ」
デュレ「それなら、フォワードスペルで」
シリア「それはやめておけ……無駄だ」
デュレ「でも！　リボンちゃんを失う訳にはいきません」
シリア「失うんだよ。他がどれだけ変わっても、それは動かせない事実なんだ」
デュレ「どうして、そんなに諦めがいいんですか。どうして。帰ろうと思わないんですか！」
シリア「言ったろ？　帰ってもいいのはオレじゃないんだ」
デュレ「じゃあ、あなたは知ってたんですか。全部、知ってたんですか！　そして、何食わぬ顔をして、ずっと何も知らない振りをしていた。そんなのって、ひどすぎます」
シリア「そんなことオレに言われても知らないよ。あいつに訊けよ……。帰ってからそれくらいの時間はあるだろう。尤も、オレが話すとは思えないけど……な。さあ、ガタガタ言わずにメッセージを送って帰れよ。もう、時間もあまりない。この機を逸したら、お前は永遠にこの時代の虜になるぞ」
デュレ「でも……」
シリア「異論は認めない。――さぁ、時計塔にメッセージを刻むんだ。それがデュレの最後の仕事……だろ？」
デュレ「そうです……。……終わりなのに始まりなんですね。……不思議な感じがします」

SE：雷が落ちる。

デュレ「セレス。時を越えてください……。わたしと一緒に……」
デュレ「あの時計の針が……違う、今じゃない……。リボンちゃん！　ここではありません。セレスの受け取ったあれはイメージだったんです。実際にわたしの言うことと、セレスの夢の間には大きな隔たりがありそうです」
シリア「何だって？」

デュレ「だって、繋がらないんです。何も繋がらないんです」
シリア「時計塔へ急げ。ぐずぐずしていたら帰れなくなる。……恐らく、因果律が崩壊する」
デュレ「え……？」
シリア「セレスの見た夢の印象とこの場面があまりにかけ離れていると言うなら、お前たちの1516年とこの1292年が断裂を起こし始めたんだ。刻まれた歴史とは大幅に異なる致命的な何かが起きたとしか考えられないな……」
デュレ「じゃ、じゃあ、先に帰ったセレスはどうなるんです……？」
シリア「そっちは恐らく無事だろう。……今なら、きっと、間に合う。デュレが帰るだけなら、何とか」
デュレ「……リボンちゃん……」
シリア「……気にすることはない。一つの“可能性”が“現実”になろうとしてるだけだ……」
デュレ「――わたしがいけなかったんですか……？　わたしが間違ったから……」
シリア「それは違う」
デュレ「……」
シリア「……気に病むな、デュレ。お前は……お前たちは何も間違っていない。だから、帰る場所を失う前に帰るんだ――」
デュレ「けど、まだ終わった訳ではありません。わたしは十三回目の鐘の音を聞くまで諦めません。――新しい歴史が生まれる。それもいいのかもしれません。けれど、もし、わたしがクロニアスだったらそんなことは許さないと思います。」
シリア「……そうだな――」

SE：激しい地響き。

デュレ「地震……？　いいえ……」
シリア「デュレっ！」
デュレ「リ、リボンちゃんが！　リボンちゃんと迷夢がまだ、大回廊に」
シリア「行くなっ。行っても無駄だっ」
デュレ「どうしてっ！　だって、彼はあなたで、あなたは彼なんでしょう？　……大回廊が潰れたり、そんなことはありませんよね……。ねぇ……、リボンちゃんはこんなことで死んだりしませんよね？　だって、もしものことがあったら、セレスはバッシュだけじゃなく、大事な人を二人も一度に……」

SE：ゴーン……、ゴーン、リンゴーン……、ゴーン……。
SE：時計塔も崩壊し始める

デュレ「鐘が鳴ってる……」

ラール「あ～あ、もう、完全に時間切れのようだよ、ルーン。この“物語”もいよいよ不遇の終焉を迎えるんだね。……ルーンのせいで」
ルーン「だっ、誰のせいよ」
ラール「ルーンのせい。ぼくのせいじゃないよ。言っておくけど。何度も何度も、ぼくが早めに手を打とうと言ったのに、それを聞かなかったルーンが悪い」
ルーン「何でもかんでもわたしのせいにしないでよ」
ラール「それでも十三回目の鐘は鳴る。けれど、所期の目的を果たすことは出来ないよ。壊れたのか、壊したのかどっちだろうね？」

デュレ「――十二回……」

　　SE：時計塔が崩れながら、瓦礫と鐘がぶつかって……。

デュレ「十三回……。こんなことって……。……帰れない……」
ルーン「そう、このままじゃ、あんたたちは帰れない」
デュレ「誰？」
ルーン「約束の時間は過ぎた。この時代を永久に封じます」
ラール「だから、口を酸っぱくして忠告してたのに。きかないからこんなことになるんだよ」
ルーン「うるさいわね。こんな時に恥さらしな」
デュレ「この白狼も連れて行きたいんです。あの、こっちのじゃなくて、あっちの……。お願いです――」
ルーン「ダメよ、リボンちゃんは連れて行けない。そう言うことになってる」
デュレ「そう言うことになってるって。そんな言葉でわたしを説得できるとでも……」
ルーン「あんたが納得しようとしまいと関係ない。リボンちゃんのために時の理を壊せない」
ラール「もう、とっくに壊れてるよ。この場合の要点はどう被害を最小限に止めるかだよね？」
ルーン「うっさいわね」
デュレ「……リボンちゃん……って呼びました……？　何で、見ず知らずのあなたがニックネームを知ってるんです？　その名前、セレスが最近になってから付けはずだから、知っている人は少ないはずです。……あなたは誰ですか……？」
シリア「――クロニアス」
ラール「あららぁ。精霊仲間の約束を破ったらダメだよ。シリアくん」
シリア「緊急事態だろ？　そんなこと言ってる場合か！」
ルーン「それでも極力避けてもらわないとね、シリアくん。特に第三者のいるところでは。――やはり、この時代は封じた方がいいみたいね。それにしても、どうして、ここだけこんなややこしくて滅茶苦茶なことになったのかしら？」
ラール「そりゃあ、もちろん、魔力のある連中が遠慮なしに暴れ回ってるからに決まってるだろ」
ルーン「……あんたはいっつも喋りすぎなの。そのうち、本気で刈っちゃうわよ？」
ラール「刈られちゃたまらないんだけど、のんきなお喋りをしてる時間はないよね？」
ルーン「そうだけど……」
ラール「これ以上、純白の年代記に書き損じを増やすことは出来ないモノね？」
ルーン「だから、あんたはうるさいのよ。少し、黙っていなさい」

　　SE：誰かが近づいてくる。

レイア「……どうして……、デュレとシリアがここに居のですか……？」
デュレ「レイアさん！　どうして、あなたがここに？」
レイア「逃げ遅れてこの様です。バッシュに頼まれたんです。その……シリアと一緒に居てくれと……。あ……わたしではバッシュの代わりは務まらないかもしれないけど……。もし、赦してもらえるなら――」
シリア「オレがお前の何を赦せばいいんだ……？　オレは何も知らない……」
レイア「え……？　あ……、ありがとう……」
シリア「礼なんか、言われる筋合いはない。オレは……いや、何でもない。これから、頼むな」
ルーン「……で、あんたは人の話を邪魔しないの。ここではわたしが“ボス”あんたらは木っ端以下なのよ」
ラール「……相変わらず、口が悪いな、ルーンは」

ルーン「と、ともかく、この時代は封じることに決めた。わたしの決定に背くことは許さない」
ラール「ここを閉じてしまうんだったら、一人くらい帰しても変わらないだろう？」
ルーン「わたしばかりに考えさせないで、あんたも考えなさいよっ！」
ラール「だって、いらない口出しをすると、ルーンはすぐ怒るじゃない。だから、ぼくはずっと静かにしてるんだよ。何時だったかなんて、もう少しで首を刈られそうになったんだ。懲り懲りだよ」
ルーン「じゃあ、今日こそ本当に刈ってあげましょうか？」